

会 議 録

会議の名称	多摩六都科学館第3次基本計画策定委員会
開催日時	令和6年3月6日(水) 午後13時30分から午後15時40分まで
開催場所	対面とオンラインとのハイブリッドでの開催 対面：多摩六都科学館 201 会議室      オンライン：Zoom
出席者	(委員) 縣秀彦委員長、天野未知委員、太下義之委員、 大道竜嗣委員（オンライン参加）、佐々木亨副委員長、田原三保子委員 (事務局) 保谷事務局長、豊田管理課長 (指定管理者)福島統括マネージャー、伊藤 GM 補佐、高橋経営管理 GL、原主任研究員、斎藤天文 GL、成田研究交流 GL、湯浅研究交流 GSL、石井アテンド GL、安倍パブリックリレーションズ GL (基本計画策定業務受託者)有限会社プランニング・ラボ 村井良子代表
議 事	1. 開会 開会挨拶、前回会議録への意見確認、今後のスケジュールの説明 2. 議題 (1) 多摩六都科学館第3次基本計画策定に係る課題解決に向けた取組提案や意見等について (2) 多摩六都科学館第3次基本計画素案に関する質問等について (3) 圏域市民意見公募（パブリックコメント）実施の結果報告について (4) 多摩六都科学館第3次基本計画に関する子ども意見について (5) 多摩六都科学館第3次基本計画に関する市民モニター意見について (6) 評価部会の進捗報告について (7) 多摩六都科学館第3次基本計画案について (8) 多摩六都科学館第3次基本計画に係る事業スケジュール案について (9) その他 3. 閉会
会議資料	資料1：多摩六都科学館第3次基本計画素案 資料2：多摩六都科学館第3次基本計画素案に関する圏域市民意見公募（パブリックコメント）の結果 資料3：第3次基本計画策定に向けて子ども意見を聴取 資料4：多摩六都科学館 第3次基本計画策定 工程表 参考1：第2回多摩六都科学館第3次基本計画策定委員会会議録 参考2：多摩六都科学館第3次基本計画策定に係る課題解決に向けた取組提案やご意見等一覧 参考3：多摩六都科学館第3次基本計画素案に関するご質問等一覧 参考4：多摩六都科学館 第3次基本計画 10 年計画事業スケジュール（事業フロー）案
会議内容	<input type="checkbox"/> 全文記録 <input checked="" type="checkbox"/> 発言者の発言内容ごとの要点記録 <input type="checkbox"/> 会議内容の要点記録
発言者名	発言内容 (別紙 多摩六都科学館第3次基本計画策定委員会第3回会議 議事録本文)

## 会議内容

### 1 開会

- 開会および開会あいさつ
- 前回会議録について意見等の確認
- 今後のスケジュール
  - ・組合事務局より資料4をもとに、今後の進め方の確認とスケジュール説明
  - ・進め方について、全員より了承を得る
- 資料4 第3次基本計画策定工程表改訂版
- 30周年記念式典で祝辞を述べた天文クラブ員（中3）の動画視聴

### 2 議題

#### (1) 多摩六都科学館第3次基本計画策定に係る課題解決に向けた取組提案や意見等について

- 組合事務局より議題(1)について、参考2に基づき説明
  - 参考2 多摩六都科学館第3次基本計画策定に係る課題解決に向けた取組提案やご意見等一覧

#### (2) 多摩六都科学館第3次基本計画素案に関する質問等について

- 組合事務局より議題(2)について、資料1、参考3に基づき説明
  - 資料1 多摩六都科学館第3次基本計画素案（付帯資料あり）
  - 参考3 多摩六都科学館第3次基本計画素案に関するご質問等一覧

#### (3) 圏域市民意見公募(パブリックコメント)実施の結果報告について

- 組合事務局より議題(3)について、資料2に基づき説明
  - 資料2 多摩六都科学館第3次基本計画素案に関する圏域市民意見公募（パブリックコメント）の結果

#### ●事務局：

パブリックコメントの結果は1件で、提出者も1人。

将来像2、将来像3について。この3月はじめに、六都なおきちが閉店するが、このような空きスペースは「ガチャガチャコーナー」や「休憩スペース」のような活用をされている印象が強く、ぜひ市民が参加体験できるような、また参加体験を通じて愛着を持てるような場を作ってほしい。また科学館からも、何かテーマを決めて活用するという方法もあるのではないかと意見をいただいた。

このカフェテリアのスペースは開館から民間事業者に委託しており、科学館の施設の効用を高める場として、利用者および近隣住民を対象とした飲食物の提供を行ってきている。この度六都なおきちが閉店ということになるが、従前通り別の民間事業者による運営をお願いする予定。

今回のご要望、ご意見については、有料施設であるという科学館の特性を踏まえながら、指定管理者と連携を図って中長期的な課題として検討していく方向で回答としてまとめた。

#### ●委員長：

パブリックコメントが1件きりだったことをどう考えるか。六都なおきちというカフェ

テリアがなくなったことは、とても大きなできごと。海外でもミュージアムに行くと、ミュージアムショップと食事ができる場所は極めて重要。具体的にはいつ頃閉じて、いつ頃再開できる方向で進めているか、もう少し情報が欲しい。

●指定管理者：

新事業者とは4月の1日に契約を結ぶ予定。保健所などの必要な手続きを踏まえて、ゴールデンウィークには本格稼働させるため、開業の1週間ほど前にプレオープン期間を設け円滑な営業を目指す。内装はなおきちの印象から変化させるため、家具等の若干の変更を考えている。メニューについても調整中。なおきちが比較的高価格帯だったため、今度の事業者には食事メインでも1,000円を超さない価格であること、子どもたちだけの利用者もいるので、その辺りを意識したメニューを展開することで同意を得ている。

●委員：

なおきちは私も2回ほど利用したことがある。以前行った板橋区立教育科学館や八王子のコニカミノルタサイエンスドームにもなかった。板橋は隣接の板橋区立中央図書館にカフェが併設されている。長い時間滞留するならば、そういう飲食店の存在は大切だし、親も助かる。なおきちはなぜ撤退になったか。平日は客足が伸びなかったのだろうか。何か理由があればお聞きしたい。

●指定管理者：

私の知る限りでは、コロナの影響があったようではあるけれども、売上の的にはさほど大きな問題なかったと思う。12月から2月にかけて、6名ほどのスタッフが個々の理由により、同時多発的に退職されたこと。応募をかけたがやはり思うように人が集まらないというところが大きな理由と伺っている。

●委員長：

この意見について私が大切だと思う部分は、市民が参画する、また市民の活動をそこで提示する、そういった機能が科学館として必要だということ。これは当然な要望で、そういったものがたくさん出てくるのは、想定される範囲だと思う。回答としてはこの回答でもよいかもしれないが、実際の第3次基本計画に、どのように反映するか。もしくは書いてあるから、それは織り込み済みであることを教えていただきたい。

●事務局：

今回のパブリックコメントは将来像2と3に関連して、質問を寄せられたもの。資料1の重点戦略の欄を見ていただきたい。委員長からご指摘があった、市民が参画する、交流する場づくりはこういう施設では必要。第2次基本計画から引き続き第3次基本計画においても、市民が参画できるような機会を作るべく環境整備などを含めて考えている。

●指定管理者：

いま組合事務局の指摘の箇所以外にも、「市民とともに圏域の価値を発信していくイベントなどを実施し」という戦略が記載されている。この中にも今回パブリックコメントで指摘されたことへの内容が含まれていると思う。

●委員長：

今までも市民に向けて、特別展のスペースが空いている時や、学習室やラボなどさまざまな活動の場はあった。市民コレクションを始めたこともその一つ。「将来像2」には交流拠点、交流するコミュニケーションが大切、社会参画とも書いてある。ただ、重点戦略

の文書を読むと、どちらかというとな受身的な市民像と読み取られかねない。そこは例えば「圏域市民が主人公になって」とか、「誰もが主体的に利用できる」とか、市民が参画しやすいしくみをしっかりと書かないと伝わらない気がする。

●計画策定業務受託者：

最初は主体的に関わることができるように記載したが、今の状況では条例の改正が必要になるなど、さまざまなハードルがある。そういった事情を踏まえて、できることから徐々に「しくみや設備などの環境整備に努める」という表現になった。

●委員長：

条例の変更が必要だという話は、この件とは別に出ていた。具体的に条例のどこに抵触するかわからない。「努める」と書いてあるから大丈夫であれば、次に「主体的だ」とか「市民が」などの表現を使っても問題はないのでは。今日の委員会で、この素案を変えることはあるのか。これもパブリックコメントの回答だから変えないのか。

●事務局：

指定管理者とも協議をした形でその文言を検討したいと思う。

●委員：

確かにパブリックコメントが大事なことは前提だが、すべての意見を受け入れることは難しい。今回この計画はしっかり優先順位をつけて次の10年を見定めていく中で、市民の参画を積極的にやるという部分は、全体的な比重として重くなかったという判断ではないか。

●事務局：

第3次基本計画では、克服すべき、取り組むべき問題も多々あり、そちらを優先する方向。もちろん市民にとって、より使いやすい施設にしていくことも必要だと考えている。それは第3次基本計画が実際に運用されていく中で考えていきたい。

(4) 多摩六都科学館第3次基本計画に関する子ども意見について

(5) 多摩六都科学館第3次基本計画に関する市民モニター意見について

●計画策定業務受託者より議題(4)、議題(5)について、資料3に基づき説明

資料3 第3次基本計画策定に向けて子ども意見を聴取

●計画策定業務受託者：

資料3は子どもの意見のヒアリング結果をまとめたもの（詳細は資料3参照）。

市民モニターの意見は、意見交換会の時とその後寄せてもらった意見をまとめている。第3次基本計画に関わるころは次のとおり意見をいただいた。使命について「科学の魅力発信のために文化振興に絞ることはよりわかりやすくとてもよいことだと思う」。科学館事業の重点戦略は、「イベントやよいニュースだけでなく課題も発信することで、地域の宝、多摩六都科学館により関心を持ったり、支援の輪が広がったりするきっかけなどになればと思う」。将来像に関しては「5本から4本になってさらに見やすくなってわかりやすくなった」。その他、重点戦略の具現化として、ロクトプレミアム年パスやファミリーパスなどの提案もあった。

市民モニターからは、今後の市民意見の反映のしくみや、市民参画のあり方について、今後の評価システムについて、どんな進め方がいいかなども意見を伺っている。それらに関しても、第3次基本計画の評価設計にも反映させたいと考える。

●委員：

この子どもたちの意見を映像として記録し、学校にアウトリーチに行った際に、同じ世代の人たちが科学館の紹介をしている映像として見せたらどうだろう。もちろん出演している子どもたちのプライバシーは配慮する。今は文字で読むよりも、音と映像の方が情報が伝わりやすい。先程見せていただいた30周年記念式典で祝辞を述べた天文クラブ員(中3)の動画を見て聞いて、内容が心にストンと落ちてくる。彼らの言葉自体がとても重要なメッセージを映像という形で活用できないか。

●委員：

この子ども意見はヘビーユーザーの意見。パブリックコメントはいろいろ募集の工夫をされたと思うが、もう少し集まっても良かったと思う。ライトユーザーや最近科学館に行っていないという方の意見が聞けるとよい。

また、市民モニターの方たちのご意見というのは何件ぐらいあったのか。

●事務局：

パブリックコメントが1件であることについて。前回の第2次基本計画策定時は5件(内容としては3件、1人から意見)ほどあった。今回は圏域市民にもパブリックコメントの実施を知ってもらおうべく、構成市の担当課を通じて、2月の市報に掲載してもらおうという初めての取り組みも行った。また指定管理者にも協力いただき、科学館のトップページにも募集を告知した。事務局としても、もう少し集まるのではないかという期待があった。次回このような機会がある時には、多くの意見が集まるような手法を考えていきたい。

●計画策定業務受託者：

市民モニターの意見交換会では、いつも現場で改善できるような具体的な提案をしてもらえることが多い。27日の意見交換会でも計画内容よりも、プレミアムパスやファミリーパスの話、入場料の値上げについてなど、重点戦略がもう少し具現化した時にどういうことができるかなどの提案が多かった。

●委員長：

この委員会の目的は基本計画の策定であり、細かく具体的なところに立ち行く必要はないと思うが資料3に書かれている、大人向けのコンテンツをさらにPRする、大学生とコラボレーションする、体験型コンテンツ、地域の行事への参加など、いろいろと具体的かつ確かに重要だと思える。基本的には第3次基本計画の素案にすべて盛り込まれていると理解した。

## (6) 評価部会の進捗報告について

●副委員長より議題(6)について報告

●副委員長：

私と明治大学の評価学の源先生と一緒にメタ評価のためのヒアリング調査を実施した。メタ評価調査報告書は、①どんな枠組みでメタ評価をしたか、②調査項目、③ヒアリング結果、④メタ評価を行った立場からの提案(第3次基本計画について評価の枠組みをこれから考えていく上で検討してもらいたい事項)の4つの観点から成っている。

### ① 調査の枠組み

第2次基本計画における評価制度、評価方法が、このメタ評価の対象。メタ評価はあくまで実際の評価の手続き、評価情報が本当はどうであったかを評価する作業。また利害関係者がそれぞれどういう関係性で評価に立ち会っていたかなど、評価報告書の内容や質などを評価する。

今回評価の方法としては、多摩六都科学館の組合のスタッフ・指定管理者の乃村工藝社のスタッフへのヒアリング、評価関係でいろいろな書類をレビューしている。

まずグループインタビューが2回、個別のインタビューを3回実施。各インタビュー1時間で正味5時間ぐらい、途中休んだりしながら、ほぼ1日費やした。

## ② 調査項目

最初にこちらで想定した調査項目は大きく分けて2つ。ランダムに1時間の中で行ったり来たりしながらお話を伺った。

●事業関係者の評価の関わり方：典型的な評価の形として評価する人とされる人とわかることは分かりやすいが、特に文化施設の評価の現場は、協働型や参加型が圧倒的に多くなってきている。その中で科学館はどういうスタイルをとって関わってきたのか。例えば評価設計にどの程度指定管理者が関わっているか、その分析過程でどのぐらい関わっているのか、情報の共有の仕方はどうだったのか。

●評価方法の検証：収集したデータの取り方が十分であったか、収集方法が適切であるか、評価報告書がわかりやすく簡潔であるか、評価報告などのタイミングはどうかというようなことを検証した。

## ③ ヒアリング結果

●評価方法のあり方：結果活用の妥当性、組織全体の戦略の明確化、評価報告書のあり方の3つの観点から分析。

例えば、評価結果活用の妥当性については、多くの方が言っていたが、評価と活動の繋がりが非常に不明確でわかりにくいことから、組織全体の戦略がわかりづらい、使命に繋がる活動が見えてこない。一生懸命数字を取っても、全体の戦略の中で何ができて、何ができてないかがわかりにくい。

次に評価報告書のあり方については一番意見が多かった。ここまでの細かさがあるかどうか疑問、情報量が多い、どちらかという行政に対する説明になっている。評価はもっと現場をエンカレッジするためのものではないかというように、評価の本質を語ってくれた発言も多々あった。

●事業関係者の評価への関わり：指定管理者がどのように関わっているか。例えば協働型とか参加型評価を行っている時は、みんな一緒に考えるというステージを作っていることが多い。それを望むもしくは期待するような発言としては、評価指標の設定の議論には今現在は関わっていないとか、評価結果は会議で初めて見るけれども、スタッフのデータとスタッフの活動は繋がっていないのではないかと。評価データの共有性であるとか、そもそも関わりが薄くてなかなか自分ごととして扱われていない、などが発言としてあった。

片や外部評価の意義では、外部評価委員が各グループの活動に関して寄り添ってもらいとても勇気づけられる一方で、外部評価委員の意見がスタッフ全体に浸透しているかどうか疑問を感じる、特に自治体側には外部評価委員の質的なコメント部分をもっと理解してほしいなど、外部評価のコメントは非常に事業をする側にとってみると、貴重な勇気づけられるコメントが多い。一方で行政サイドに寄ると、やはり数字だけ扱われる。それがうまく使われていないのではないかという意見。

●今後の評価について：質的なデータもとっているが活用されていない。インタビューやトラッキングを使った来館者調査も必要。先ほどモニターはヘビーユーザーであり、そうではない人がどういう実態であるかは、細かなインタビューやトラッキングを行うと大変よくわかる。そういうことも必要ではないかという意見もあった。

#### ④ 今後検討したいポイント（考察）

●科学館のミッションに紐づいた全体事業計画の明確化：評価を行っている、データは確かに集まる。それが本当に館の目指している方向に、どのように役立っていて、どのように使えばいいのかがなかなか見えてこない。例えばロジックモデルを使ってアウトカムが評価指標になるような形で行うと、評価のデータとアウトカムのロジックが繋がるのではないかと。

●職員とともに指針と再検討と改善への提言：アウトカムと評価がとても密接になってくると、やはりそれ作るときに職員と一緒に指標を考える、目標値を考えるという作業が当然付随してくるのではないかと私たちは考える。もっと職員とスタッフの人たちがなんらかの形での関与や参画が必要。

●質的データについては先ほどと変わらない（説明割愛）。

●評価報告書について：事業改善を目的とした評価報告書であれば、第一義的な読み手である館の職員にとって、もっとわかりやすい内容にまとめる必要があると思う。もちろんこれは行政評価の部分もあるので5市に対してはしっかり説明できるデータも必要。しかし改善に役に立たなければ、これは本来的な意味では違うものではないかという意見があった。

●職員自身の学習効果と組織強化につながる評価の実施：評価は本来もっと現場をエンカレッジするためのものではないかという意見がある。評価学の世界でよく言われている ECB（エバリエーション・キャパシティ・ビルディング）という、評価能力を自分たちで高めることによってエンカレッジできるような雰囲気や環境を作っていくことがとても重要されている。この評価の場を、うまく職員自身の学習効果と組織評価に繋がるようなしくみ一つ上のレベルで考えていけば、何か改善ができるのではないかと。この評価部会のチームのレポートの内容となっている。

人数的、時間的にも一番乃村工藝社の人から多くヒアリングさせてもらった。乃村工藝社自身もきっと指定管理者独自の評価のやり方を持っているはず。でも今のこの枠組みとの整合性があまりうまく取れていないように私は感じた。そこは必ずしも一致する必要はないと思うが、さまざまな指定管理者を手がけている乃村工藝社のノウハウと、多摩六都科学館で行っている評価の枠組みがうまくリンクして、お互いにメリットあるような形で進めることができれば状況は改善されるのではないかと一個人の感想として思った。

#### ●委員長：

評価のしくみは、20年前に第1次基本計画策定の際、佐々木秀彦さんら何人かで作った。それをそのまま20年近くやってきた。今回はそのしくみを変える方向性という理解でよろしいか。

#### ●事務局：

はい。多摩六都科学館の事業評価については、平成16年に評価委員会を立ち上げて、そこから外部評価を導入し、評価活動を進めてきている。計画と評価システムを連動させたPDCAのサイクルという形で実施してきた。第2次基本計画の運用中も、この評価活動を10年間行ってきたが、課題や運用しにくさが出てきたことも踏まえ、今年度、現場や専門家の意見なども聞きながら、見直しを行う取り組みを始めた。

#### ●委員長：

多摩六都科学館の強みとして、評価委員会があって評価結果を設置者、つまり圏域5市の組合、首長や議会に対して意見を持たせることは極めて重要なしくみになっている。それがないと9年に1回のこの会議で言ったことしか反映されないということになりか

ねない。毎年行われる評価と、その評価結果を設置者、市民に対し、また市民からの意見を受け取ってという機会にも一部活用できる場面がある。評価を簡略化することや、乃村工藝社のしくみを導入することは賛成だが、大きな枠組みはぜひ有効に活用されることを個人的には希望する。

今日の主題である第3次基本計画の素案、資料1の3ページ目が、我々もここにかかっている。今のメタの視点からの評価の見直し結果を、重点戦略や将来像に書き込む必要があれば検討してもらおう。ここに書いておけば多分変更されるだろう。

●計画策定業務受託者：

それとは別に事業評価のあり方で1ページ作ろうと思っている。これから佐々木委員や源先生と相談しつつ、現場などにも意見を聞いてまとめていきたい。

●副委員長：

評価の枠組みを変えることはとてもエネルギーが必要で、すぐにできることではないので、今後どこかで行ってもらえればよいと思っている。

資料4の工程表の評価部会の11月22日の現場ヒアリング以降が実態とは違うようだ。そこは今後どういう枠組みするかという検討の時期も含めて、修正した方が実態に合っている。

●事務局：

その点は修正をかけて、また皆様にご提示する。

**(7) 多摩六都科学館第3次基本計画案について**

- 事務局より議題(7)について、パワーポイントを利用してモニターで説明
- 計画策定業務受託者より議題(7)の第3次基本計画の頁立て説明

**(8) 多摩六都科学館第3次基本計画に係る事業スケジュール案について**

- 事務局より議題(8)について参考4に基づいて説明  
参考4：多摩六都科学館 第3次基本計画10ヵ年計画事業スケジュール  
(事業フロー)案

●委員長：

今後のスケジュールの大体の見込みを教えて欲しい。

●計画策定業務受託者：

今年度に関しては方針と大枠をしっかりと押さえおけばよいと考えている。計画初年度である来年度は乃村工藝社も新体制で始まることもあり、計画の具体的な進め方は検討・調整しつつ進めていくことになると思う。

●委員長：

第2次と第3次で端的にいうと、どこがどう違うか、大きく異なるのはどこかというポイントだけ教えてほしい。

●計画策定業務受託者：

第3次で将来像が5本から4本になったこと、扱う範囲が地域づくり全体という大きな範囲から文化振興に絞り込んだことが大きな違い。それから評価設計は、現場と相談しつつ進めていく計画なので、来年度に指標の検討を考えており、第3次基本計画では指



標はまとめないということで切り分けている。

●委員長：

今回は基本計画の大枠が決まってそれが提出される。今日までの私たちの議論の中で大きな反対意見などは今のところ出ていない。資料3、参考2、3の資料で、議員や構成市の人たちから出された意見もある。重要だけど反映されてないのではないかと、構成市の意見でも取り入れられないなどはあるか。

●計画策定業務受託者：

基本的に全部盛り込んで、皆さんのご意見を反映させた素案になっている。

●委員長：

大きな変更はないという前提で、我々委員が確認した。あとは評価のしくみを変えろとか、指標を作り直すという作業は、年度が変わってから継続して早期に行う。他に継続してこの後進めなければならない作業は何かあるか。

●計画策定業務受託者：

重点戦略に関しては、来年度実際に進めていながら現場の方たちと相談をして、来年度末に見直しがかかる可能性がある。

●委員：

いくつか抽象的な言い回していることが気になった。

ひとつは、将来像2のところ、「次世代を担う子どもたちだけでなく、幅広い年齢層が生涯学習の場として利用できるようなソフトの充実に努める」という箇所について。「ソフト」という言い回しを、ソフトという表現にまとめずに、具体的に書いていただきたい。「子ども意見」の中で触れた、デジタル化・ICT技術の利用はこれから重要になっていくと思う。どこかにこのICT技術とかデジタル化とかそういう言葉を入れ込んでもいいのではないかと感じた。

もう一つはソーシャル・インクルージョン。来館者のほとんどは常設展示を利用しているが、その人たちに対してソーシャル・インクルージョンの視点でどのような取り組みをしていくか、もう少し具体的に考えていただきたい。先日館内を回った時に、例えば解説サインなどで多言語が併記されていない場所や、表現が子どもには難しいのでは思える場所があった。来館者の誰もがそのサインを読めて学べるような更新計画が今後重要になる。最近「ソーシャルストーリー」という自閉症スペクトラム障害の方へ訪問前の事前学習のようなツールや、感覚過敏の方向けの「センサーマップ」など様々な取り組みが美術館などで行われている。私たち動物園でも遅ればせながら取り組み始めている。こういう取り組みもソーシャル・インクルージョンの一環として、今後大事になっていくのではないかと。

将来像3「広報などの研究開発に努め」という表現について。これは広報の手法の研究開発という意味か。いまSNSによる情報の発信ってとても重要になってきている。科学館でもX(旧Twitter)やInstagramなどを使われていると思うが、今後より重要な情報ツールになっていくので、この運用の仕方も計画の中で検討していくとよいと思われる。

●事務局：

委員からご指摘いただいた点については、具体的に進めていく中で指定管理者とも協議をしながら検討していきたいと考えている。

●計画策定業務受託者：

指定管理者側では、すでに SNS の改善には取り組みは始めている。

●委員：

去年私は「ミュージアムのトリアージ」というレポートを書いた。今後人口減からくる税収減では、今と同程度の公共サービスを維持できなくなる。実際公共施設のトリアージは地方部では橋梁のトリアージが始まっている。私は今後ミュージアムの世界でも同様のことが起こると思っている。すべてのミュージアムが今のまま残るということはあり得ない。そういう前提で考えると、科学館事業という中核事業が一番大事なのもちろんだが、その下の地域拠点事業の地域の方々との交流は、これまで以上に大切になる。これまでは子どもを中心に据えた公共サービスだったかもしれないが、少子化ということもあり、圏域のあらゆる人たちに対して、科学館として関係性を持つことができるかを真剣に考えていく必要がある。例えば西東京エリアの高齢者施設とどういった関わりを持つのか、この圏域の福祉関連の団体や NPO 当事者とどう関わりを持つのか。

重点戦略 4 について、あまり見えてこない点。圏域以外の人に、何か注目して来てもらえるような仕掛け、プログラムが必要。圏域外の人が来館時に「多摩六都科学館はすごい」と感じるような場面を創出することで、それは地域の人にとっても誇りになる、嬉しいと思えることになる。

●委員：

以前私も経験したが、業務仕様書の文章は抽象的な文言でしめられている。指定管理者はそれをどう読み解いて事業化するか。おそらくこの第 3 次基本計画の素案から解像度を上げていくことになる。さまざまな事業の中でやりたいことと、できることと、求められていること、それぞれすべての目的がファンを増やすということに尽きると思う。多摩六都科学館が愛され、活用され、利用されるという場で末永くあり続けてほしいと思っている人たちがたくさんいる。それを目指して職員の皆さんが頑張っていることも知っている。現場が大変であることはわかっているが、それでもファンを 1 人でも増やして欲しいと思っている。

●委員：

今回この 1 枚素案をまとめられたが、これだけで 10 年間を進めていけるというわけではない。この素案は、本当に将来像、戦略の方向性であると思う。

民間企業の計画づくりの話などいろいろ情報収集はしている。今、時代の流れがとても早く、もう 10 年計画を立てないようなところもあるらしい。短いところでいうと、1 年とか半年とかそういう企業もある。一方で将来的なビジョンの目指す方向は、何かを示すものがないと進まない。今回作られた素案をもとに、今度はアクションプランであったり、具体的な事業計画だったりに落とし込んでいくと思う。その時もこの 10 年間を、まるで新規の取り組みばかりということにはならず、今あるものをどう継続していくか、地域のニーズなどをどう取り込んでブラッシュアップしていくか。実際に動かしながらブラッシュアップしていけるようなしくみが重要で、指定管理者を含めて今後計画を具体的にしていくためのアクションを起こしていくことが重要だと思う。

●委員：

今、お二人の委員も言われた「ファンづくり」について。たまたま私は大阪市立自然史博物館と伊丹市昆虫館の外部便益測定調査も係わっているが、両館とも市民だけでなく周辺の人たちも、自分が行けなくても孫や子に行かしてあげたいという遺贈価値が大変高いことがわかり驚いた。この科学館もきっとそれに近いような状況でないかと思う。圏

域だけではなくその周辺の人たちも楽しめるようなプログラム。そういう人たちの価値を、5市の市長や議会の人たちに説明すると、すごく説得力がある。地域だけではなく、周辺にも認められている。そういうようなデータ取りも、10年に1回ぐらい実施してみるととてもよいデータが取れるかと思う。

資料4の事業スケジュールにおける第3次基本計画の1年目令和6(2024)年は、新体制の実施方針の確立とある。この1年間はいろいろな試行を実施して方針を固める期間と考える。評価においても、指標検討とか評価試行と書いているが、試行しながら徐々に固めていき、意思疎通を図ることは大事だと思う。とてもよいスケジュールリングだと思った。

●委員長：

この地域のニーズを汲み取ることをぜひお願いしたい。それにはこの箱から外に出ていくべきで、交流拠点ではあるけれど外にもチャンネルを持ってほしいと思う。多摩六都科学館のイメージは、30年間で皆さんの頭の中にあると思う。前回話した財政の基盤を作る、安定させるために、この第3次基本計画が役立つことを強く願っている。その辺の書き方は気をつけてもらいたい。

この先10年、20年を考えると、月を人類がまた歩いたり、次は火星に行ったりしているかもしれない。また60年もすればさらにAIが発達し、動物や植物と普通に会話ができるかもしれない。大きな変化が起ころうとしている。そうした中で、大きな夢を科学館に来て感じたり、将来を感じたりというのが科学館の魅力だと思う。10年前、20年前と比べると現在の計画は縮こまっているように個人的には感じる面もあるが、逆に科学館の活動が定着してうまくいっている証拠なのかもしれない。

子どもたちのみならず、地域の人たち、科学館の来館者に、夢や希望を与え、元気づける存在として、今までもそうだったがこれから頑張っていってほしいと思う。

(9) その他

●事務局より今後のスケジュールの説明

3 閉会